

取材先の人生を背負い続けたい

芦屋「九条の会」14周年記念のつどいの講師：
坪井兵輔さんからのメッセージを掲載します。

◆報道カメラマンとして出発◆

私の先輩からもらった座右の銘は「半径4キロの散歩圏にこだわり、地を這い、声なき声に耳を澄まし、できるだけ身近に引き付け、社会に問う」「取材先の人生を一生背負う」の2つです。ネイチャーカメラマンとして自然を記録したいと放送局を目指したのですが、自然よりも人間が織りなす実社会に魅せられ、報道カメラマンになりました。神戸支局に配属された後、東西冷戦の象徴であったベルリンに3年半赴任したのですが、ドイツにいたのは1年もなく、大半が中東のKUWAITを中心に自衛隊イラク派遣や日本人誘拐事件、アメリカの対テロ戦争でアフガニスタンや中東、ボスニア・ヘルツェゴビナなどの悲しい紛争地の取材が大半でした。



帰国後は希望してラジオの記者になりました。このラジオのマイク一本だけの極めて、身軽な取材手法に大きな可能性を感じました。過去を隠して生きるハンセン病回復者、息を潜めて生きる犯罪加害者家族、永遠に消えない苦しみを背負わされた犯罪被害者遺族、ヘイトスピーチに苦しむ在日コリアンの少女、大震災や自然災害の遺族…、決して個人を特定する映像化が許されない方々がラジオだからこそ語ってくれた言葉に毎回自分の無知と社会・時代の見方が如何に浅く、浮ついたものであったかを突きつけられました。

◆ドキュメンタリーは歴史の証人◆

中でもラジオドキュメンタリー「獄中13年～軍事独裁経験に立ち向かった在日留学生の青春」では差別に苦しみ、未来を描けずに韓国のソウル大学医学部へ留学した在日の若者が、北のスパイとして死刑判決を受けた事件を取材しました。南北、朝鮮半島と日本、日本社会と在日、在日1世と3,4世…様々な分断に翻弄され、未来も人権も奪われ、絶望の淵に沈め

られても、祖国の民主化を願い、自分の使命をつかみなおす生き様に深い感銘を覚えました。

そうして2011年ごろ、ちちんぷいぷいのニュース担当ディレクターになりましたが、東日本大震災一色の2年間でした。念願のTVドキュメンタリー専属ディレクターになったのは2014年です。日本最大の日雇い労働者の街、あいりん地区の小学生の半年を見つめた番組、また関西発の恒常的に米軍が駐留する京丹後の米軍レーダー基地ができるまでを追った「見えない基地～米軍・レーダー基地計画を追う」を制作。ドキュメンタリーは歴史の証人であり、時代の鏡だと思っています。自分の暮らす芦屋・神戸の安倍政権にとって「不都合な事実」の発掘を始めました。その結果が神戸へのアメリカの核持ち込みや朝鮮戦争への日本民間人派遣と犠牲を扱った「知られざる最前線～神戸が担った日米同盟」や、神戸の海上自衛隊や非核神戸方式に焦点を当てた「よみがえる最前線～神戸と核と日米同盟」などです。

◆権力監視を避ける民放に変容◆

しかし、天職と思ってきた民間放送局という職場は気が付けば、大きく変容していました。経費がかかる報道番組より、利益を上げる制作番組が貴ばれ、権力監視を避け、誰にも批判されようのない安易なヒューマンドキュメンタリーに放送が優勢になりました。情報格差をなくし、弱者に寄り添うことが当たり前と思ってきましたが、気が付けば、私は少数者になっていました。こうして言いたいことを言うために教員に転じましたが、これからも「取材者であり、取材させて頂いた方の人生を背負い続けたい」と思っています。



【訃報】

芦屋「九条の会」の世話人として活躍された西岡喜久夫さんが4月5日にご逝去になりました。同会世話人・前代表として活躍された福間公子さんが5月21日にご逝去になりました。ご冥福をお祈りいたします。